

だから俺は、一色いろ
はが嫌いだ。

ゆうむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一色いろはの事が嫌いな男子と一色いろはが、一緒にエイプリルフールを過ごすだけです。

キャラの設定や物語等が原作と矛盾している可能性があります。

主人公はオリジナルキャラクターです、ご了承ください。

一色いろはファンの方、好き勝手言ってごめんなさいという理由でアンチ・ヘイト付けました。

■登場人物紹介

・月夜野

一色いろはのクラスメイト。

一色いろはが嫌い。

・一色いろは

あざとい

目次

- だから俺は、嘘をつく。 ————— 1
- なのに俺は、一色いろはと店にいる。 8
- しかしたまに、褒めてみる。 ————— 17
- やはり俺は、一色いろはが嫌いだ。 23

だから俺は、嘘をつく。

「好きです、付き合ってください」

放課後の誰も居ない教室で、俺はクラスメイトの女子に告白した。

俺の言葉に、目の前の少女は一瞬困惑した顔をし、そしてくすりと笑う。

「いいですよ。付き合いますよ」

告白の返答はYESだが、少女の表情は、どこか人を小馬鹿にするようであった。

だから俺は、一色いろはが嫌いだ。

当然、俺の告白は本物ではない。

今日がエイプリルフルだから、面白そうという理由でやっただけの嘘である。

「それで、月野夜は私のどこが好きなんですか？」

そんなことを聞いてくる一色いろはの表情は、恋人が出来て浮かれている少女の顔ではない。

人を試す様な顔である。

そう、彼女もまた面白そうという理由でこの告白乗ったのだろう。

そしてこの質問は、俺に対する軽い挑戦みたいなものだ。

「私の何処が好き？」なんて質問は、本当の恋人でも咄嗟に出てこない物。

しかしそれは想定済みなのだ。

「そうだな、まずその小学生が粘土で作った様にしか見えない、雑な作り物の様な性格が好きだ。

後は、上っ面は好意があるかの様に近づいてくるくせに、人を馬鹿にしているのが見え見えで隠しきれてない所も好きだ。そして、自分の都合しか考えてない自己中な所も好きだね」

「えっと、それって好きな相手なら短所も受け入れて上げて！というやつですか？」

「そういう都合の良い部分しか取り入れずに、都合の悪い事は聞き流す部分とかすごい

好きだね。

好き過ぎてお前をその窓から突き落としてやりたいわ。もちろん自殺という事にして」

「じゃあ恋人同士一緒に自殺するというのはどうですか？私は後を追うので先にどうぞ」

「嫌だわ、お前はそう言つて絶対自殺しないでだろう。それに俺はお前の死体を火葬したと見せかけて死姦趣味の奴に売り払わなきゃいけない」

「えっ、なんですかそれは。流石に気持ち悪すぎです。キモすぎて引きます」

「キモい事くらい自覚してる。だが、お前の脳みそよりは数倍マシだ」

一色いろはとは、普段からゲロをゲロで染める様な話しかしない。

だからエイプリルフールの嘘で告白してからかうのも別に抵抗はないし、一色いろはが俺の告白に冗談で乗ってくるのは想定していた。

一色いろはは相手を手玉に取るのは好きだが、手玉に取られるのは嫌いな奴だ。

だから「えっ、何言ってるんですかエイプリルフールでもやめてください」と、言つて軽くあしらつてくる事もあり得ただろうが、どうやらこちらの冗談に乗る方向で来たらしい。

「ところで、恋人って何するんだらうな」

「え、考えてなかったんですか？」

考えてなかったというより、わからないというのが正しい。

余計な事は考えているくせに、根本的な部分は無計画なのであった。

とりあえず、飴でもやろうかと思いポケットを弄る。

出てきたのは、昨日買ったエロゲのレシートであった。

「一色、食うか？」

「なんですか、それ」

「飴」

「いやいや、それレシートですよ？私、ヤギじゃないです。月夜野が食べてください」

「よ」

「俺はもう食べた」

エロゲだけに、とは言わない。寒いから言わない。

「というか恋人らしい事で、飴あげる事を思いついたんですか？ちよつと幼稚じゃないですかね……」

「俺はさ、そういう「彼氏ならもつと楽しい話してください」みたいなのが嫌いな訳よ。せつかく人が思いついた善意を踏みにする奴は、人として終わっていると思う訳」

「月夜野は常日頃から、私の事を踏みにじってますよね？」

「あつ、一色？スカート捲れてパンツ見えてるぞ」

「はっ!?マジですか!？」

慌てて立ち上がり、体を捻じってスカートを確認する一色いろは。

「嘘」

「何なんですか・・・」

「今のは結構、面白かった」

座つてるときは見えてなかったのに、勢いよく立ち上がったせいでパンツが見えた所は予想外に面白かった。

色は白だった。

「いや、それ面白がってるのは月夜野だけですよね、私は楽しくないです」

「やっぱり、予想外の事が起きる方が面白いよな」

パンツ見えたし面白かった。これは言わないでおこうか。

「はあ。相変わらず月夜野は良く分からないですね。というか、折角なのでこれから何か食べにいきましょう」

「はっ？」

「いや、何処かお店に行こうってことですけど、わかります？超恋人らしいじゃないです

か？」

突然話を変える一色いろは。

何？何処か店に行くって言ったのか？

正直、それは予想外だった。

一色いろはは、俺のクラスメイトである。

見た目は可愛い、男子にも良く接する、少し天然の入ったゆるふわな性格と話し方。

そんな彼女に好意を向ける男子も少なくはない、はず。

問題は、その性格と態度が明らかに作り物だとバレバレな所だ。

なので、一色いろはは同性からの印象が悪い。

この性格なら、ぶりっこだビツチだの陰口が起きるのは当然だ。

けて、一色いろはには友達がいけないという訳ではない様ではある。

だが前に、一色いろはは周囲からはめられ、本人の意思を無視して無理やり生徒会長

選挙に立候補させられていた。

それに同性だけでなく、一部の男子からの評価も悪いらしい。

それは彼女が自分は可愛いという事を使って、男子を利用したがるからだ。

猫かぶるくらいなら、正直どうでもいい。

けれど、それを利用して面倒な責任や作業を押し付けて、更に金にたかる様なら嫌われるのも無理はない。

実際、一色いろはがそれをどこまでやってるのかは知らないが、

「好きだから」という理由を除けば、基本的に彼女が男子と関わるのは「使えるから」だろう。

それに、異性の知り合いが多い方が、同性として上、みたいな所もある。

最初のきっかけは忘れたが、恐らく一色いろはが俺に話しかけたのも、あまり周囲と関わりを持っていない、いわゆるぼっちと呼ばれる俺なら使いやすそうとか、そんな理由だろう。

媚び媚びの顔と態度でそれはすぐわかる。

だから俺は、一色いろはが嫌いだ。

なのに俺は、一色いろはと店にいる。

「ていうか、なんで私が店決めないといけないんですか、それでも彼氏ですか」

ということで、俺と一色いろはは、街のカフェに来ていた。

「うわそんな事でキレるとか短気過ぎかよ引くわ。」

お前のその「私は男子にエスコートしてもらって当然なの」みたいなお花畑理論言っちゃうとこ好きだわ。吐きそう」

というか、こんな女子に人気ありそうな店は普段来ないから、聞かれても困る。

「言つときますけど私、実はそんなお姫様みたいな頭してませんから。」

この前だつて学校の先輩を自分から遊びに誘いましたし。こう見えてエスコートするのは慣れてるんですよ」

一色いろはは色っぽい表情を作りながらそう言う。

すぐくビンタしてやりたかったけど、何とか踏み留まる。

「でもお前、その先輩に奢ってもらったんだらう？」

「まあ、そうですけど。奢ってくれると言ってくれましたし」

「ふーん。あ、俺は奢らないからな。お前が奢ってくれるつてのは良いけど」

「月夜野って、私の事何だかんだと言う癖に自分も結構自己中ですよね？」

「目には目を齒には齒を、って言葉知ってる？自己中なことする奴には自分も同じ事をするわけ」

注文していた、良くわからない飲み物を吸う。甘くて美味しい。

「このなんちやらって飲み物中々美味しいわ。一色いろはと違って、安っぽい甘さじゃない。」

それに、一色いろはと違って有毒な食品添加物とか入ってなさそう」

「やっと私を馬鹿にする事以外の話を始めたと思つたのに、結局私を馬鹿にするの止めましよう!?!いい加減、怒りますよ？怒つたので、月夜野は女の子に奢ってくれないケちな奴って言いふらしますね。誰が良いかなー、それじゃあ、結衣先輩にしますね。由比ヶ浜結衣先輩って知ってますよね？」

一色いろはは、まさか結衣先輩を知らない？とでも言いたそうな目で俺を見る。

「知ってるよ。奉仕部の、たまーにお前と一緒にいる先輩だろう」

「へー、ぼっちのくせに知ってるんですね。あ、もしかして結衣先輩の事狙ってるのか？」

「お前よりは数倍良い人だろうな。お前と結衣先輩、どっちと付き合おうと言われたら結衣先輩かな」

由比ヶ浜結衣という先輩は、その明るい性格の御蔭で顔が広いのと、奉仕部という一部では有名な部活に入っているので、話は良く聞く。

直接会話をしたことがあるのは一度くらいだが、少なくとも一色いろはより良い女である事はまちがいない。

一色いろははあざと過ぎるから。

「あの、彼女の前で別の女子が良いとか、普通言わないですよね?というかそれ嘘じゃないですよ?素になってませんか?エイプリルフルール忘れてますよね?」

つい本音が出てしまった。

「エイプリルフルールだからって嘘しか言っではいけないというルールはない」

「あ、嘘じゃないんですね。もしかして本当に結衣先輩狙ってるんですか?でも諦めた方が良いと思いますよ。月夜野じゃ結衣先輩と釣り合わないですし」

「葉山先輩に告白して振られたお前に言われると説得力あるな」

「それ言いますか!?結構気にしてるんですけど!?てか結構色んな話知ってるんですね、ぼっちのくせに」

「まあ、お前に話す良いネタになりそうだったから当然」

「うわー、性格悪すぎです。というか歪み過ぎです。比企谷先輩より酷いです。」

月夜野も奉仕部入ってその性格を治して貰ったらどうですか?一度、雪ノ下先輩に説

教された方が良いと思いますよ？」

身内のネタを容赦なくぶち込んでくるなんて、少々失礼では？

まあ、俺は比企谷先輩も雪ノ下先輩も知っているんだけど。割と有名人だし。

雪ノ下先輩は美人秀才完璧な、学校じゃ知らない人はいないくらいの超有名人で、

比企谷先輩は、前に一色いろはが無理やり生徒会長選挙に立候補させられた時に助けてもらったという話だ。

ちなみに、2人とも学校ではぼつちらしい。ちよつとした親近感と、妙な対抗心が沸く。

「奉仕部ねえ、俺が出来るとは思えない部活だな」

いや、あのぼつちで有名な比企谷先輩が出来るのだから、俺にも出来るのでは？

しかし、雪ノ下先輩はなんというか、正論の塊みたいな人だ。俺では間違いなく太刀打ち出来ない。

いや、あのぼつちで有名な比企谷先輩でも出来るのだから、俺にも出来るのでは？

それに雪ノ下先輩はかなり美人だし、一色いろはの様に媚びて男子を利用する様な人じゃない。

そんな先輩と関わりが持てるのは、俺的にポイント高い。

だが、そういう人こそ、実は色々めんどくさかったりするのだ。

うん、雪ノ下先輩は中々めんどくさそうだ。完璧主義そうで。

そして意外と、恋愛面ではメンヘラに違いない。愛が重そうだ、雪ノ下先輩。

いや、しかし。あの雪ノ下先輩がメンヘラは少しそそる所がある。あれ？もしかしてそういうの好きなのか？俺は。

「え、もしかして本気で入ろうとしてますか？正直、奉仕部に月夜野が入る場所なんて無いと思いますけど。というか、入れる雰囲気じゃないと思いますよ」

「入らねえよ」

そう。ただ考えていただけだ。途中から少し熱が入ってしまったが、実際に入る事はない。

「いや、今絶対考えてましたよね？顔見ればわかりますよ、そうですね？可愛い女の子が二人もいるんですから気にもなりますよね？うわ、そんな下心あるんですか？キモ・・・凄いですね」

意外としつこい一色いろはである。

「え、お前一人で何言ってるの？一人コントの新しいタイプか何か？芸人目指すの？」

それなら、もう少しインパクトある顔にした方がウケるんじゃないか？ちよつと顔面殴ってやろうか？安心しろ、非力な俺の力なら鼻の骨が折れたりはしないだろう」

「さて、そろそろ次のとこにいきますか」

なんて奴だ、食いついてきたと思つたらすぐに離しやがった。

「まじでお前のその都合悪くなつたら逃げるの好きだわ。ほんと好きだわー」

「いや月夜野も結構同じことしてると思いますが。というか、その好きだわーつてやつ持ちネタなんですか？正直つまらないですよね」

「持ちネタでもギャグでもないから面白さとか求められても知らんぞ。お前みたいに芸人目指してないし」

「いやそこを引つ張るんですか!?芸人目指しませんから、いい加減にしてください」

流石にからかいすぎただろうか。

「つてか何、まだどっか行くの!?!」

「え、行きますよ?もしかしたら「お二人は恋人ですか?ただいまカップル割引をしてみしてー」みたいなお店があるかもしれませんよ?」

月夜野の事なのでそういう経験ないでしょうし、というか一生出来なさそうですし、今日しかチャンスないですよ?」

「いや別に興味ないし、てかそんな店実際にあるのかよ」

「え、知らないんですか?本当に童て・・・ぼっちなんですね。流石に可哀想になつてきました」

今、童貞つて言いかけたよな?これだからゆるふわピッチは困る。

「無知なのは認めるが、別にどうでもいいじゃねーか。お前の頭よりは可哀想じゃない問題ない」

「いやー、男として可哀想というか」

「お前のその、自分は性別以前に人間として可哀想だと言うのに、他人には好き勝手言うところマジ好きだわ」

「はーい、それじゃあ次へ行きましようねー」

また、そうやって話を反らす一色いろは。

「お二人は恋人同士ですか？今日は特別にカップルサービスをしております」

会計に来た俺たちへ、若い女性店員がそう告げる。

カップル割引の店が本当にありやがった!?!しかも、今いた店がそうだったとは。

ちらつと一色いろはを見ると、何だか自慢げな顔をしていた。

ち、やつぱり鼻をへし折ってやった方が良いだろうか。

政治はアニメを規制する暇があつたら、一色いろはの事は殴っても許されるみたいな法律を作れ。

「はい、恋人です！」

勢いよく宣言する一色いろは。

「では、その証明としてキスをしてください」

店員が笑顔でそう言う。

「は？」

しまった、思わず声が出てしまった。

キスしろって言ったのかこの店員は？なんだ、これはアニメかエロゲなのか？

ちらりと一色いろはの様子を見ると、一瞬、俺と同じように「は!? マシ!？」と言いたげな顔をしたが、すぐ作り笑顔になり、

「らしいですよ、月夜野」

ぐい、と一色いろはの顔が近づいてきて、俺は思わず後ずさりした。

あんまり下がりが過ぎたので、コツンと背中が壁にぶつかる。

「あらあら、初々しいですね。うふふ」

そんな俺の様子を見て、店員が微笑んでいた。

そして、続けて。

「あ、キスしてくださいというのはエイプリルフールです。うふふ」

「あのさあ」

いやほんとに、冗談にならんだろう。何を考えているんだ、この店員は。

ほっとした様な一気に疲れた様な、そんな俺を見てか一色いろははくすくすと笑って
いた。

だから俺は、一色いろはが嫌いだ。

しかしたまに、褒めてみる。

俺たちはもう一店だけ寄り、その後帰宅する事となった。
思いの外時間が経っていたようで、外はもう薄暗くなっている。

「月夜野、今日は楽しかったですか？」

帰りの電車の中で、ふと一色いろはがそんな事を言う。

「あー、タノシカッタヨ」

外の景色を眺めながら、適当な返事を返す。

「そうですかー」

一色いろはの返事もまた、淡泊なものである。

実際のところ、楽しかったかどうかは自分でもわからない。

俺は女子と2人で街に遊びに行った事などないし、そもそも相手が一色いろはだを意識する事がないし、楽しいかどうかなどわからないのだ。

電車の窓から、駅のホームで手を繋ぐカップルが見える。

本当に好きな人とだったら、違うのだろうか。

何考えてるんだ俺は。

しかし今日は今日で、一色いろはを煽っていると暇はしないので詰まらなくはなかった。

「月夜野つて私の事嫌いですよね？それなのにどうして私と関わるんですか？」

「そういう一色こそ、なんで俺に構うんだ？俺は何も奢らんし一緒にいても徳はないどころか、俺はお前を煽る事しかないのにな」

「ふふーん、なんででしょうねー？」

一色いろははそう言うと、座る位置を俺にぴったりと近づけてきた。

俺の表情は、見るからに嫌悪感で溢れているはずだが、一色いろはは気にしない。

「もしかしてお前つてマゾなの？そういう趣味なの？」

「なんでですか!?!違いますよ!」

端から見ると「なんだあのバカップル」みたいに見られそうだが、電車に乗客が少ない事が幸いだ。

「いやーしかし月夜野、今日は結構私の事好きって言ってくれましたよね。というか告白とかしてきましたし」

「殆ど皮肉みたいな事ばかりだったろう」

今日、俺は嘘でも一色いろはを褒めた事を言っただろうか？貶してばかりで何も言っ

てないはずだが。

うん、そうだな。ここであえて褒めてみるのも、逆にからかいがあるかもしれない。

「なあ、一色。嘘とか抜きにしてさ、実際のところお前つて結構、可愛いよな」

・・・。これは言ってるこつちが恥ずかしい奴だ。

こういうのは半端にすると余計恥ずかしいので、もっと冗談を混ぜた方がよい。

「え、いきなり何言ってるんですか、本当に口説いてるんですか？やめてくだ」

一色いろはのセリフを遮る様に、俺は話を続ける。

「一色はふざけているように見えて、実は真面目だし、生徒会の仕事も頑張ってるし」

なんでや、と心の中で自分にツツコミを入れる。

確かに、一色いろはは頭がゆるそうに見えてそれなりに芯はある奴だ。

だが、だからと言って皆がそこまで、じつくりと評価してくれる訳じゃない。

普段から男子に媚び売って周り、都合の良さそうな奴を利用している様なら、他人からの評価が下がり陰口を言われても因果応報だ。

どうせ生徒会の仕事も誰かに頼らないと出来ないに違いない。

一色いろははぼかんと口を空けて俺の話を聞いていたが、すぐに鼻で笑い飛ばした。

「あまり嘘ばかり言っているから友達出来ないんですよ？」

「お前が言うな」

というか、俺が一色いろは以外の他人にこんな馬鹿にするような事は言わない。つまり、その理論は間違っている。

「・・・」

数秒の間、お互いに何も言葉を発さずに沈黙が続く。

一色いろはは、じつと俺を見ていた。

そして、一色いろはは、ふう、と溜め息を吐く。

「もうすぐ駅に着いちゃいますね」

「うん、そうだな」

妙に距離が近いせいか、一色いろはの高い声で耳がざわつく。

俺はそれから逃れる様に、一色いろはから少し距離を取る。

しかし、一色いろははまた距離を詰めてくる。

「私、エイプリルフルって好きなんですよね。だって」

それどころか顔を寄せてきて。

「月夜野が、私に好きだって言ってくれるから」

俺の耳に、一色いろはの唇が触れるか触れないか、そんな距離だった。

一色いろはの甘ったるい声が耳を撫で、ぞくぞくとした感触が身体を伝わる。

「ひい、うっ!!」

「えー、なんですかその声?もしかして月夜野って耳弱いんですか?」

寒気がする、しかし気持ち良いともいえる感触に、思わず声が出てしまったらしい。

くそ、完全に不意打ちだった。

というか、こいつ今、何か変な事を言わなかったか。

(月夜野が、私に好きだと言ってってくれるから)

一色いろはのクソあざとい声は、頭にはつきり残っていた。

「ちっ、からかう様な事言いやがって」

これだから一色いろはという奴は、腹が立つ。

「あはは、もしかして本当に好きになっちゃいました?顔真っ赤ですよ?って、痛ひ痛ひ

!!やめてくだひゃい!!」

けらけら笑う一色いろはの頬を横に引っ張る。

「好きにとかならないから」

「ちよ、ちよっと!もう駅に着きました!着きましたから!降りられなくなりますー!」

駅に着いたので、一色いろはの頬から手を離すと、一色いろはは頬に手を当てながら

ぴよんぴよんと跳ねる様にして駅のホームへと降りた。

「夜道でストーカーに刺されて死ぬなよ」

「月夜野こそ、死なないでくださいよ」

「あ、今のはエイプリルフールの嘘な」

「え？ちよつとそれどういう」

一色いろはの声を、電車のドアが遮る。

引つ張られて赤くなつた頬を膨らませる一色いろは。

そんな彼女に手を振ると、一色いろはははべーつ、と舌を出して古典的な挑発で返してきた。

ああ、やっぱり。俺は一色いろはの事が嫌いだ。

やはり俺は、一色いろはが嫌いだ。

学校というものは、本当に憂鬱だ。

毎日とは言わないから、せめて水曜日を休みにしてくれればいいのに。

そんな事を考えながら廊下を歩いていると、あざとい作り笑顔の女子、一色いろはが目に入る。

夜道でストーカーに刺されて死んだりはしなかったらしい。

そして、一色いろはと話をしているのは、雪ノ下先輩に比企谷先輩である。

どうやらその教室が奉仕部の様だ。

先輩方の前で一色いろはを煽ろうとは思わないので、気付かれない内にそのまま速足で通り過ぎようと試みる。

が、しかし。その3秒後には、一色いろはがこちらを向き、あざとい笑顔で軽く手を振ってきた。

とりあえず、ゴミを見る様な目で一色いろはを睨み、直ぐに作り笑顔で手を振りかえす。

残念なことに、今の俺にはそれが精一杯だった。

俺は小心者だ。先輩方の前で余計な事をしようとは思わない。

「あら、一色さんの知り合いかしら？」

雪ノ下先輩の、澄んだ声が聞こえる。めちやくちや綺麗で良い声だった。きつと声にマイナスイオンか何か含まれているに違いない。

ちなみにマイナスイオンが健康に良いみたいな効果は、科学的に証明されてないと聞いたことがある。

けど、今の声には何か体に良い成分が含まれているに違いない。

一家に一台、雪ノ下雪乃先輩。

というか、雪ノ下先輩は真面目過ぎるくらいに真面目なイメージがあつたが、思つていたよりスカートが短い。

真面目＝スカートが長いというのは、ただの偏見だろうか。

と、あまり見過ぎて気付かれるとまずい。雪ノ下先輩の脚を見るのはこのくらいにしておこう。

いや、もうばれてるかもしれない。

「あ、はい。あの比企谷先輩みたいな目つきの悪い人は、同じクラスの月夜野です」

「あの、さらつと俺をデイスるのはやめてくれませんか？」

「なるほど、確かに目つきは比企谷君に似ているわね」

「ホントですよ、しかも月夜野は超性格悪くてー」

「おいそのゆるふわビッチ、聞こえてるぞ。エイプリルフルはもう終わったろ？」

流石に無視してられなくなり、そう言ってしまふ。しかし、先輩二人がいる事で地の利を得ているからか、一色いろはこちらを挑発する様な顔で笑い、そしてまた先輩二人と話を始めた。

ここにいてもしようがないので、俺は舌打ちを吐いてその場を後にした。

やっぱり。

俺は一色いろはが嫌いなのだ。

それでもきつと、俺はまた一色いろはとこの罵倒を掛けあう関係が続けていくのだらう。

そしてまた、一色いろはが先輩に告白して振られた時の様に、彼女の何かが終わったその時は、

笑っていたら罵倒してやろう。

そして泣いていたら、その負け様を間近で見やろうじゃないか。

おわり。